



最優秀賞

神奈川県 茅ヶ崎遊技場組合
『みんなで作ろうみんなの思い出』推進事業



茅ヶ崎遊技場組合 組合長
高山裕幸さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会 委員
永井多恵子氏



家庭に事情のある児童や知的障害のある子どもたちのために開催した地引網大会。鯰、イサキなどがあがり、歓声をあげている子どもたちの声が聞こえてくるような支援活動だ。スイカ割り、相撲大会、アンパン競争など、子どもたちにとって、何よりの思い出になったことだろう。組合員たちが汗をかいて企画をし、子どもたちの喜びが還ってくる。組合員の社会貢献の意欲の向上にもつながっていることも大きな成果だ。

絵日記に描くテーマを持たない子どもたちに夏休みの思い出を提供する

地元の海を舞台に思い出作りに協力

全国各地の都府県方面遊協、支部組合、組合員ホールは、それぞれの地域の実状や特性に合わせた社会貢献活動に取り組んでいるが、寄付や寄贈とは違った形で地域に貢献しているところがある。その一つが15社/16ホールで構成される神奈川県茅ヶ崎遊技場組合である。

同組合が提供しているのは、「思い出」。地域にある児童養護施設や知的障害児入所施設の子どもたちに「夏休みの思い出」となるような体験学習の機会を提供している。そのために知恵を絞り、自ら汗をかく。「施設の関係者の方と話をする機会があり、子どもたちが夏休みの絵日記を描けないというお話をうかがいました。それは思い出となるような体験がないからなのですが、とくに、まだ自分たちだけで活動できない小学校低学年以下の子どもたちが楽しむ機会がほとんどない。その子どもたちがみんなで楽しめるものはないかと考えたのが始まりです」と話すのは、組合長の高山裕幸さん。

高山さんたちはさっそく組合内に実行委員会を立ち上げ、検討に入った。全国的にも知られた海岸を持つ土地柄ゆえに海を舞台にしたもの、恐怖心や不信感から大人を避ける傾向にある子どもたちが大人と触れ合う機会を持てるもの、安心・安全を確保できるもの、地域の人々も参加できるものなど、いろいろと知恵を絞る中で、地引網をメインに、ゲーム大会を加えたものにしようという意見がまとまった。

準備期間も含め、実施当日には数多くの参加者、協力者が集った。養護施設児童・知的障害児童70名をはじめ、施設責任者、地域児童とその保護者、市長や市議員、シェフ、ライフセーバー、漁師、近隣ボランティア、支援業者、組合員、神奈川県遊協関係者など、その数は200名以上。施設への参加要請、企画・準備、会場設営、実施はすべて組合員が中心となって自自行った。実施まで何度も打ち合わせを重ねるうちに、協力者の数はどん



網を引くと、鯰、太刀魚、イサキ等が捕れ大漁だった



施設から届いた手作りの感謝状



子どもたちが大人と触れ合う楽しさを体験できるようなゲームを企画した



捕れた魚を調理する子どもたち

どん増え、組合員の奥様なども進んで参加するようになった。子どもたちに安心して楽しんでもらうにはどうしたらいいかという共通の課題にみんなが同じ目線で取り組むことで、組合員相互の連帯感も強まったという。これだけの数の協力者がいたということは、高山組合長以下、組合が日ごろから地域に溶け込み、強固な人脈を築いていることを示す証だろう。

抱きついてくる子どもたちから感動をもらう

もちろん、一番喜んだのは当日の主役である子どもたちである。みんなで力を合わせて引き上げる網の中でピチピチはねるたくさんの魚に目を輝かせ、それをボランティアと一緒にさばき、パスタや天ぷらにして食べる。あるいは砂浜で行われたスイカ割り、相撲大会、パン食い競争(実際はフルーツを使用)などのゲームに参加し、大人と触れ合うことの楽しさを体験した。それが子どもたちの心にどれほどの感動をもたらし、すばらし

い思い出となったかは、実施後に組合に送られてきた数多くの感謝の手紙や絵が物語っている。地引網や調理の体験から、なかには将来、漁師になりたい、料理人になりたいという子どもたちもいたという。

「最後に挨拶したら、子どもたちが、ありがとう、来年もやってね、と抱きついてきた。あれには感動のあまり、泣きそうになりました。ホールのスタッフ、お客様、取引業者の方々、地元の商店の方々も、今年もやるんだろう、ぜひ声をかけてと盛んにいってきます。楽しいのは子どもたちだけでなく、大人も一緒。また、同業の近隣組合などからも一緒にできないかといった問い合わせも来ています。規模が大きくなると大変なことも増えますが、ぜひ、継続していきたいと思っています」と、高山さん。子どもたちの感動や思い出は、大人たちの感動や思い出ともなる。そこには助けるものが助けられ、助けられるものが助けるといふ、本当の意味での相互扶助の精神が息づいている。